足羽川河川環境整備検討会

第1回

議　事　骨　子

開催日時　　：　平成17年9月15日（木）　午後1時30分～午後3時30分

会議開催場所：　福井県教育センター　4F　大ホール

◆　議事次第

1. 開会
2. 挨拶
3. 委員メンバー紹介
4. 運営要領について
5. 委員長及び副委員長の選出
6. 委員長挨拶
7. 検討会設立趣意
8. 審議
   ①足羽川の現況と河川環境整備に関わる課題について
   ②基本方針（案）及び今後の予定
9. その他
10. 閉会

◆　議事骨子

1．運営要領について

運営要領について、案のとおり承諾された。また、委員長には進士五十八委員が、副委員長には荒井克彦委員が互選され、承認を得た。

2．審議について

事務局より①足羽川の現況と河川環境整備に関わる課題について、②基本方針（案）及び今後の予定について説明があり、意見交換が行なわれた。主な意見は以下に示すとおりである。

（1）計画全体

・　街づくりは全体の調和とバランスが重要である。世の中の価値観も時代と共に変わっていく中で、この整備検討委員会の果たす役割は大きい。

・　計画は激特事業の5年間だけでなく、その後も継続して進められていくのか。

　→【事務局】　５年間に限った計画ではなく、それ以降のことも踏まえて考えていく。ただし、長いスパンの計画の中で、激特事業の5年間における具体の計画内容を明確にする必要があり、委員の方々にご意見を頂きたい。

・　これまでの河川整備によって、水域の連続性や、生物生息空間の連続性、さらには人とのつながりが分断されてきた。水や生物や人とのつながりを再認識し、回復させていく必要がある。

・　桜も含めて計画策定に際しては時間軸が重要な要素となる。短期的、長期的スパンの両方の視点で物事を判断していく必要がある。

・　長期計画については、着実に連綿と実施し、見守っていくことが重要である。

（2）河川環境について

1）環境

・　激特のように、治水の安全度を上げることを最優先する事業においても、環境を考慮するというのが、国のスタンスである。今回の足羽川の件では、まさに最もいい事例になる。

・　現在の足羽川の低水護岸は2割勾配の2面張りであり、滑りやすいなど、水辺に近づきにくい状況になっている。水際部に工夫を施し、川そのものの自然と触れ合えるような場所につくりかえることができるチャンスであり、そのための具体の議論をしていく必要がある。

・　川そのものの動きを見ていくと、州がたくさんついている。これは川本来のもつ自然の力、ポテンシャルが高いことであるが、その分、維持管理のことも考える必要がある。掘削の方法について、単に川を平らに切るのではなく、このような川の動きの特性を踏まえてデザインしていく必要がある。

2）桜堤について

・　桜の寿命50年として、現在の桜を移植することは可能か。

- NHK通りの桜も、足羽川の桜とほぼ樹齢的には同じであるが、NHKの地中化電線の埋設工事のときに5本ほど移植した。そのうち2本はグリーンセンターへ運び移植したが、現在も生育している。
- 毎年実施している「さくらパトロール」において、桜の様子を市民の皆さんと点検しているが、移植しても、相当犠牲になる桜があるのではないかというのが実感である。
- 現在桜の内部が空洞のものは無理に移植しても難しい。大体、木の場合、空洞率が何％以上の木になると、樹木医会では非常に危険であるという判定を下して、場合によると、県などの指定樹木でも、無理なく切る例がある。
- 震災復興の極めて大切な桜である。桜を仮に移植して、生存率が1割、2割あるとして、それに要する期間、プロセスはどうなるか。
- 大木を移植する場合は、まず鉢つきにする必要がある。また移植の時期にも問題がある。あのような大木だと、100本植えて100本完全に活着させるということは、至難の業である。
- 治水安全上、堤体そのものにそのまま存続させるわけにはいかないが、桜の足羽川というイメージをどう継続するかが課題となる。
- 延長6キロにもおよぶ桜並木について、移植可能な木とそうでない木を判別・点検し、具体の移植方法や新植する場合は、その品種も含めて、全体像を作り上げていく必要がある。
- 堤防の桜並木の配列については、すべて桜で覆って壁を作ってしまう必要はなく、足羽山などが借景として視野に入るように途中で途切れていてもいい。川の景色をダイナミックにするには、幾らでも可能性がある。
- まずは、1本ずつ専門家がチェックし、移植可能であるか判別する必要がある。
- ソメイヨシノの樹齢は80年説、60年説とあるが、おそらく80年も今のような状態が維持できればいい。ソメイヨシノは病気とか虫とかに非常に弱い。
- 1本1本については、一人一人の市民は愛着がある。基本的には守るという方針、守る精神が必要である。ただし、ほとんど半死状態のものを無理やり、保全ということは現実的ではない。絶えず老木もあれば若木もあるというサスティナブルな風景をどうやってつくるかということを考えたほうが、これからの新しい時代に合うのでは。
- 福井市民があれほど思う桜である。移植についても、技術的な視点から、可能・不可能

を専門家がしっかり整理し、広く市民の理解を得る必要がある。

- 現況の桜は、生き物であり、しかも自分より昔からそこにある歴史である。守るということを基本にしたい。3年もすれば桜は見ごたえを持つが、市民はそういう時間軸では見てくださらない。それが市民感情というものであり、そこを大事にしないといけない。
- 桜は川の中にどうしても残しておかなければならないのか。シンボルとして、別の場所への移植も可能ではないか。
- 足羽川の治水対策を契機に、現況の桜堤を上下流へさらに拡大して、さらに住民が誇れるものに仕上げていくという姿勢も大事である。
- 堤体の補強の必要性について、市民にわかりやすく説明し、桜については、全体をもっときめ細かく、桜は一本一本診断してノーかイエスかを判断し、パブリックコメントを出していく必要がある。
- 堤体の安全性とか、その脆弱化を考えたときの現状分析と評価をする必要がある。そして、堤防が弱体しているところは強化対策のため切らざるを得ないことになる。しかし、その後の復元の方法、将来イメージ、対策までをセットで情報公開していく必要がある。
- 堤防の安全性について堤防の一番大事なところに根が入っているという状態をそのまま維持するというのは、かなりハードルが高いとご理解いただかざるを得ない。ただし、改修したときには木を全部切ってしまうような1かゼロかの選択ではなく、堤防の持つべき信頼性の中で必要な条件をはっきりさせる必要がある。
- 破堤したところは桜がなかったところである。そういう素朴な市民の疑問について、今回の水害の経験則の中で、どのように説明していくか。
- 市民が納得できるかということである。そのためにシンポジウムを開催したり、総合的に問題提起していくことが、この高学歴社会では必要である。できるだけ体系的、客観的な形で評価、代替案の提示等をしていかないとコンセンサスが得られない時代である。
- 積極的に、河川空間が利用できて街全体が元気になる、川を介しながら皆が楽しくなっていくといった、ポジティブな視点に立つ必要がある。川の問題は専門家対市民といった対立構造にしてはいけない。

(3)利活用・景観

- 子供のころは、足羽川にはボートなどいろいろなものがあり、市民の生活のいろんなこと

に絡んでいた。今は花見ぐらいしかなく、もっと住民の方々の考えを入れて、この機会に全体のことをまとめていく必要がある。

- 昔は船着き場や渡しもあった。スローライフという言葉が今はやっているが、ジェット機のようなものばかりでなく、ゆったりと水に舟を浮かべてというのは水辺空間の最良のところである。福井らしい、北前船のイメージなどを重ね、盛り上げていきたい。
- 福井は住みやすさ日本一であるが、都市の顔がない。それが福井市の最大の課題である。中心街の川であり、福井の規模に見合った、維持管理もできるような、魅力ある川としての実現化に向けていきたいと強く願う。
- 福井市では、都市景観条例を平成３年に立ちあげ、国の景観緑三法の施行とともに、１７年と１８年の２年をかけて都市景観条例を見直しする。足羽川と桜並木を調和させ、都市景観条例に位置づけていきたい。
- 現在、福井市では、中心市街地の大工事を行っており、これは四、五年のちょうど激特が終わるころには完成する。現在、観光、産業の視点からハード事業だけでなく、市民、また観光客のいやしの空間が必要だと痛感している。
- 福井には歴史的な施設とか、史跡とか、たくさん種類があるが、点でしかなく、線で結んでいく必要がある。観光の視点から、桜の春の一瞬だけでなく、１年間を通じた足羽川の活用方法について研究していきたい。現在、福井市でも観光ビジョンを準備しているところである。
- 福井には、市民がプライドを持てるとか、ふるさとの自慢ができるとか、外に向かって発信していけるといったものが少ない。都市政策、観光政策をセットにして、現在福井にあるものをうまくつなぎ合わせていく必要がある。また、川で舟をこぐなど、通年で楽しめる何かが必要である。
- 水辺に親しむということは、やはり市民生活の中での楽しみの１つである。我々も様々なイベントを展開しているが、水辺の整備の中で、電源とか排水といった細かい部分についても考慮されるとありがたい。
- 福井大学のお花見カヌー下りというのがあるようだが、例えばこういうカヌーのグループには、実際に利活用するものの視点で、護岸・船着き場の構造やオープンスペースの必要性といった要望を具体的に提案していただきたい。無理を無理ではなくする技術は必ずある。なければ知恵を出せばよい。そのような作業を経ることで、ほんとうに良いモデ

ル河川になっていくのだと思う。

- 市と県が一緒に川と街、自然、歴史をつなげて、経済を活性化させていくのだ、住民にとって自慢の場所にしていくのだという姿勢で大切である。
- 商工会議所のさくらパトロールもそうであるが、場合によっては有償ボランティアでもいいので、足羽川の桜のために力をお借りしていく必要がある。
- 河川と沿川市街地の土地利用を、県と市がうまく役割分担していくことで、この計画は単に河川の治水対策だけではなく、本当の街づくりの機動力になっていくと思う。

(4)基本方針(案)及び今後の予定

- 全体イメージは、もう少し個性的なものである必要がある。ロンドンはテムズ川、セーヌ川はパリというイメージがあるように、福井は足羽川という迫力のある、福井県民のスローガンになるものを考える必要がある。
- 街と川をつなぐ。山と川をつなぐ。歴史とつなぐ。生き物とつなぐ。そして、最後には、地元の市民がみんなつながるといった、“つながる”がキーワードと考える。

(5)その他

- 福井の「歴史のみえる街づくり」関し、「さくらの小径」に関する位置づけを変更しているので修正願う。
- プレスの方々に言いたいこととして、川は今まで、洪水といったネガティブなときにしかあまり関心を持ってもらえなかった。ほんとうに川というのは小さな公園が幾つ頑張っても勝てないぐらいの大きな自然であり、都市の座標軸であり、重要な役割を果たしている。ぜひ川の大切さについて取り上げていただきたい。そして、市民から投書欄でもよいので、これからの足羽川に関する議論をぜひ紙上でやって頂きたい。市民の声には専門家がしっかり答えていく。無理なことは無理だと言えば、市民はそれを理解してくれるはずである。
- 街と川をつなぐ。山と川をつなぐ。歴史とつなぐ。生き物とつなぐ。いろんなつなぎ方が大事で、実はそれで最後には、地元の市民がみんなつながって、川を取り巻くNPOがたくさんできて、川をずっと皆で盛り上げていく。桜の管理もそうであるが、管理者が少人数でやるのだったら大変なことでも、樹木を大事にする人々が集まれば、維持できるのです。そういうきめの細かい維持管理というのは、やっぱり市民の力が集まらないとできない。

市民同士がつながっていく、これが最終的な形である。

・　市民が深く関心を持っていただくことが重要である。その窓口になれればと考える。